

預託・育成牧場を活用した分業化の取組

- 酪農家の後継牛の育成に係る労働負担を軽減するため、公共牧場を活用した乳用牛の預託やTMRセンターによる育成預託事業の実施など、地域の関係者が連携して後継牛を育成し、酪農家へ供給。
- また、自給飼料基盤が脆弱な地域においては、粗飼料の生産が盛んな地域へ乳用牛を広域に預託し、後継牛を確保する取組も進展。

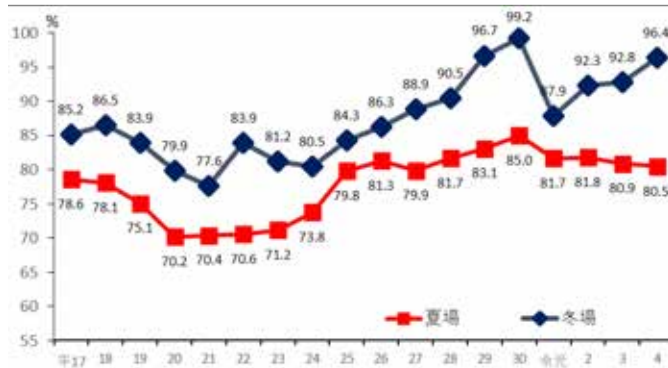
○ 公共牧場の利用状況

公共牧場とは

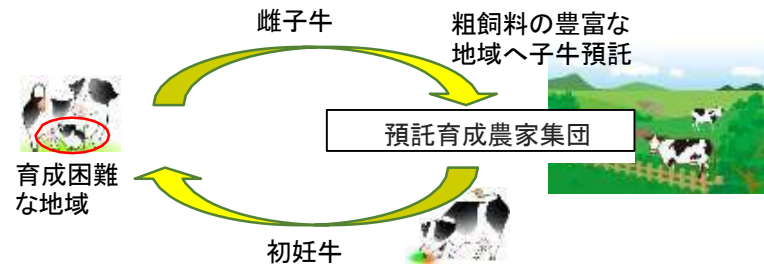
○ 公共牧場とは畜産農家の労働負担の軽減や不足する飼料基盤の補完等を図るため、畜産農家が飼養する乳用牛や肉用牛を一定期間預かり、放牧等を通じてそれらの飼養管理を行う牧場。令和4年において約700か所が稼働している。



○ 公共牧場の利用率の推移(全国)



○ 広域預託育成の取組（広域預託）



【酪農経営支援総合対策事業(alic)における広域預託の支援頭数】

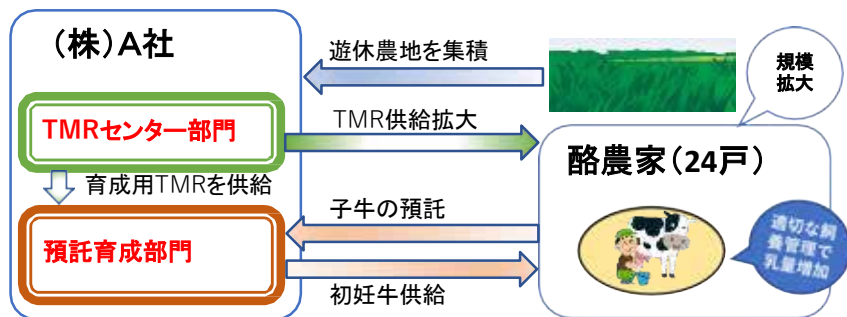
H30年度実績: 4,468頭

R元年度計画: 6,041頭

※預託先は両年度とも50農場

○ TMRセンターによる預託育成の取組（分業化）

TMRセンターが酪農家のために搾乳以外の作業の外部化を引き受け



ICTやロボット技術の活用等による酪農の生産性の向上、省力化の推進

- 酪農の生産基盤強化を図る上で、分娩間隔の短縮や子牛の事故率低減、労働負担の軽減を図ることが重要。
- このため、ICT(Information and Communication Technology: 情報通信技術)等の新技術を活用した搾乳ロボットや発情発見装置、分娩監視装置等の機械装置の導入を支援し、酪農経営における生産性の向上と省力化を推進。

搾乳ロボット



搾乳ユニット自動搬送装置



発情発見装置



分娩監視装置



哺乳ロボット



機械装置

搾乳ロボット

搾乳ユニット自動搬送装置

発情発見装置

分娩監視装置

哺乳ロボット

導入前

搾乳牛1頭毎に1日2回以上搾乳するための労力と時間が必要

自力で搾乳機(約9kg)を移動させるため、労働負担が大きい

毎日一定時間の発情監視が必要(夜間の発情見落とし等の懸念)

分娩が近い牛について、事故がないように24時間体制で監視

子牛1頭毎に1日2回以上哺乳するための労力と時間が必要

導入後

自動的に搾乳が行われるため、搾乳作業の労力が基本的になくるとともに、搾乳回数の増加による乳量増加に効果
Ex: 導入後、1頭当たりの飼養管理時間が約40%削減

搾乳機をレールで自動搬送するため、搾乳にかかる労力を軽減でき、人手不足に効果
Ex: 導入後、搾乳に必要な労働者数・時間が減少

発情が自動的にスマホ等に通知されるため、監視業務の軽減や分娩間隔の短縮に効果
Ex: 導入後、分娩間隔419日まで短縮(全国平均432日)

分娩が始まると自動的に連絡が来るため、長時間の監視業務が軽減
Ex: 導入後、分娩事故率が大幅に減少(2.2→0.3%)

自動的に哺乳されるため、省力化とともに、子牛の発育向上に効果
Ex: 導入後、子牛の哺乳に係る労働時間が80%低減